

日本的英米人(1)

竹田津 進

はじめに

ノーベル文学賞を受賞したパール・バック (Pearl Buck, 1892-1973) はその日本人論の中で、「イギリス人の控えめな言い方やアイルランド人の誇張法には慣れているのですから、日本人の曖昧さも受け入れ、理解したらどうでしょう (We have accustomed to British understatement and Irish hyperbole; why should we not, now, accept and understand Japanese ambiguity?)」と言っていて¹⁾、イギリス人やアイルランド人、そして日本人の言葉使いをステレオタイプ化している。

人間は人種的あるいは民族的なステレオタイプ (先入観・固定観念) にとらわれやすい。例えば、アメリカ人は陽気で楽天的であるとか、イタリア人は情熱的であるとか、ドイツ人は几帳面であり、日本人は謙虚で礼儀正しい、というような先入観である。確かに、他民族をある特定の枠にあてはめて認識しようとすることは、エスニック・ジョークに見られるように、人間の性とも言おうか、古今東西を通じて行われてきたことである。しかし、我々日本人のことを考えればわかるように、そういう先入観というものはある面では正鵠を射ているかもしれないが、的外れのことも多々ある²⁾。

1) パール・バック『私の見た日本』(1966: 242; 2013: 224) [出典の翻訳がある場合、原典と翻訳の両方の引用箇所を記載している]

2) 加藤 (1967: 10) が、マーガレット・ミードの「アメリカ人を一般化して論ず

民族的あるいは文化的差異が意思疎通に及ぼす影響や、それが引き起こす問題点を回避して効果的な意思伝達を行うための方略など、近年、異文化コミュニケーションという研究分野が人気を得ている。たとえば、日本人とアラブ人が話しをするとき、アラブ人の対人間の距離は、相手に息のかかる距離が適切であり³⁾、日本人同士のとる距離よりも狭いため⁴⁾、アラブ人は距離を詰め、日本人は距離をおこうとし、だんだんアラブ人が日本人に詰めよるので、日本人はあとずさりし、最後は日本人が壁際に追い詰められるということが起るらしい。

身体言語にしてもしかりである。人を呼び寄せる時に日本人は手招きするが、英米だと「さよなら」という合図になる⁵⁾。中指で押しボタン式電話を押したり、何かを指し示す日本人を見ると、当惑するアメリカ人は多いはずである⁶⁾。女性が口元を抑えて笑うしぐさもアメリカ人には未熟に映るようだ⁷⁾。電話で話をするときに、ありがとうございますと言いながら、知らずのうちにお辞儀をする日本人は少なくないと思うが、外国人は違和感を覚えると言う⁸⁾。身体言語は文化が異なると部分的な理解しか得られないとホールが言うように⁹⁾、異文化間の人々における身ぶりによる誤解の例は枚挙に暇がないであろう。

言語や思惟様式に関わる誤解も同じようによく起こる。アメリカ人の家庭に招かれた日本人が、「紅茶とコーヒーはどちらがいいですか」と聞かれたとき、「どちらでもいいです」と答え、アメリカ人の女主人を戸惑わ

ることはほとんど不可能のように思われる」という言葉を引用していて、それは研究者の共通認識であると思われる。アメリカ人に限らず、ステレオタイプというものは事実にとぐわぬ面があるのは明白である。

3) ホール 『かくれた次元』(1966: 159-160; 1970: 220-221)。

4) 野村 『身ぶりとしぐさの人類学』(1996: 50-51)。

5) プロズナハン 『しぐさの比較文化』(1988: 128)。

6) プロズナハン(前掲書: 187)。トレジャ 『アメリカ風俗・慣習・伝統事典』(1987: 11-12; 1992: 18-19)。

7) 小林 『身ぶり言語の日英比較』(1975: 113-115)。

8) ジョイス 『「ニッポン社会」入門』(2006: 103)。日本通のジョイスがイギリスでこれをやり、姉から怪訝な顔をされたと言う。

9) ホール 『文化を超えて』(1976: 76; 1979: 90)。

せてしまうことがあるようだ¹⁰⁾。日本人にとっては遠慮であったり、意思表示を曖昧にする性癖かもしれないが¹¹⁾、「自己主張するのを躊躇しない¹²⁾」アメリカ人の思考方法とは相容れないであろう。『「甘え」の構造』で令名高い土居健郎氏が、初めて渡米し、アメリカ人家庭に招かれた際、日本人特有の「遠慮」をしてアイスクリームを食べそこなった話を紹介して¹³⁾、これが氏の甘えの研究の端緒になったと言う。

妻が夫の職場の上司や同僚に対し、「主人がいつもお世話になっております」というのも、日本人には「よくできた妻」ということになるかもしれないが、英米人には悪妻と映る¹⁴⁾。親しい英米人に頼み事をするとき、「I hate to bother you but...」とか、「I know you are busy but...」というような日本的な発想の前置きをすると、英米人は普通そういう言い方はしないので、戸惑いを覚えると言う¹⁵⁾。

言葉の概念にしても、「粘り腰」とか「二枚腰」というような「腰」という概念が英語にはなく¹⁶⁾、説明に窮することがある。「恩」や「義理」というような日本人独特の考え方も欧米人には理解しがたい面があるであろう。

10) 西田 『実例で見る日米コミュニケーション・ギャップ』(1989: 41-45) にも同様の例があり、日本人が落ち入りやすい誤解のようである。

11) カニングハム 『海外子女教育』(1988: 12, 16) に、アメリカに住む日本の子どもは、返事を曖昧にしがちなので、アメリカ人教師にイエスカノーかを迫られることがあるようだ。

12) Rozman・Kato: *The American Mentality* (1989: 31)。

13) 土居 『「甘え」の構造』(1971: 1-2)。

14) 水谷は 『英語の生態』(1982: 85-86) で、夫の人格の独立性を無視したことになり、英語国民は不審の印象を持つと言う。直塚は 『欧米人が沈黙するとき』(1980: 97-102) で、「でしゃばりで、ごますりで、夫を侮辱する妻」という否定的な反応を引き起こすと言っている。

15) ジョイス 『「ニッポン社会」入門』(2006: 95)。

16) 小林 『身ぶり言語の日英比較』(1975: 29-32)。

日本的性質を示す英米人

言語的あるいは非言語的な領域における差異のために生じる誤解が、外国人との円滑な意思疎通を行う際に支障になり、相互理解を妨げることがある。民族的文化的な差異を理解し受容することは、支障なく意思伝達をし、異文化を理解するためには大事なことである¹⁷⁾。しかしあまり違いを意識しすぎても不都合が生じる気がするし¹⁸⁾、差異のみが強調、増幅されて一人歩きしている感がないでもない¹⁹⁾。違いのみが強調されると、人間として共通に持つ普遍的な特質とでもいうものを見過ごすことにならないか。

異なる文化の枠組に規定されるとは言え、同じ人間であるから、共通部分があるはずである。人間というのは、相違点よりも共通点のほうが多いので、もっと共通性に着目すべきではないかという考え方もある²⁰⁾。そういう共通部分の理解があつてこそ、実のある異文化交流や異文化間の意思疎通が可能になるのではなからうか。

イギリスに滞在した際に、いわゆる「イギリス紳士」というような²¹⁾、

17) 青木は『異文化理解』(2001: 4)で、「文化をうまく理解して対処しないと政治や経済も動かない」とまで言っているのは、傾聴に値するであろう。

18) ネウストプニーは、『外国人とのコミュニケーション』(1982: 17)で、外国人を差別しない人でも、実際に外国人に会うと、同国人のときとはちがう態度や行動に出ることがあると言う。

19) 青木(前掲書: 107-120)は、断片的な印象から類型化されたステレオタイプが一人歩きしたり、偏見に繋がる危険性について述べている。小坂井も『異文化受容のパラドックス』(1996: 98-101)で、「西高東低の外国人像」と言っていて、西洋人が高く評価され、アジア人や黒人が否定的なイメージを与えられていると言う。

20) 松尾『国際交流スピーキング』(1983: 210-211)

21) イギリス紳士の定義については、小林の『イギリス紳士のユーモア』(1990)に詳しい説明がある。藤原も『遥かなるケンブリッジ』(1991: 65-69)で概説している。ミルワードは『イギリス風物詩』(1983: 209)で、外国に出掛けるイギリス人に上流階級の出身者が多く、この人達が外国人の抱くイギリス人像を作り上げていると言えなくもないと言う。池田は『自由と規律』(1949: 4-6)で、オックスフォードやケンブリッジの学生生活が「紳士道の修行」の場になってきたと言っている。

明治以来の定説が必ずしも事実ではないということに、当然のことながら再認識させられ、民族的な固定観念にいわば洗脳された怖さというものが身に染みたことがあった。「大英帝国、紳士の国という先入観からなかなか抜け出せない」と木村は言うし²²⁾、「山高帽にこうもり傘というステロタイプが虚像」と藤原も指摘するとおりである²³⁾。

英米では名前を呼ぶ時には、ファーストネームを使うのが一般的とされているが²⁴⁾、アメリカの大学で運動部の学生同士が苗字で呼び合ったり、教室で教授が学生を苗字で呼ぶというような体験をしたことがある。またアメリカの大学では、教授はTシャツとジーパン姿で講義をするというような記述を目にしたこともある。中にはそういう教授もいるが、実際はきちんとネクタイを締め、上着を着用する人も少なくない²⁵⁾。

イギリスやアメリカの小説や雑誌を読んだり、映画を観たりする際に、いわゆる英米的先入観や固定観念からは逸脱した、日本的な趣のする描写や場面に遭遇し、目から鱗が落ちる思いをすることがある。本稿では、そういった事例を紹介し、異文化理解の観点から、また日本文化にも触れながら考察したい。

ここまで英米人というおおざっぱな括りで話を進めて来たが、イギリス人とアメリカ人とでは、国柄や国民性、言語行動や思考様式において違いがあるのは明らかである。ホールはかなりのページを割いて英米人の違いについて論じていて²⁶⁾、とても同じ英語を話す民族とは思えないほどであ

22) 木村 『イギリス交際考』(1984: 234)。

23) 藤原 (前掲書: 247)。

24) ホールは『沈黙のこぼれ』(1959: 70; 1966: 97)で、海外に赴くアメリカ人を対象に、他の人をどういうときに苗字でなく、ファーストネームで呼ぶか、その法則を説明するような実験を試みたが、きちんと答えられる人はいなかったと言う。子どもを叱る母親は、子どもをフルネームで呼ぶことがあるとも言う(ホール 1959: 77; 1966: 107)。

25) 青木は(前掲書: 100) アメリカは服装が非常に大事な社会であり、服装の社会的表示としての意識では、ヨーロッパより強いところがあると言う。

26) 『かくれた次元』(1966: 138-144; 1970: 191-199)において、電話の使い方、近所付き合い、話し声の大小、目の動きなどの相違が誤解を生む場合を考察している。

る。また、異なる民族間の差異よりも、同じ民族内での個人間の差の方が大きいことがあるという指摘もある²⁷⁾。さらに社会や文化は時代とともに変わる。この20~30年くらいの間に、日本社会も国際社会も大きな変貌を遂げてきている。かつての常識や通説が今では古めかしくなっているところもあるかもしれない。こういう点も念頭におきながら考察を進めていきたい。

1. すねかじり

欧米人には、日本は子ども天国と映るようである²⁸⁾。日本の子どもが甘やかして育てられる傾向が強いのは²⁹⁾、英米の子育てを見聞するとよくわかる。欲しいものを買ってもらえないと、店の床に寝転がって手足をバタバタさせて泣きわめくというような、英米人から見れば恥ずかしい光景を繰り広げるのを目にすることもある。乳幼児と添い寝をしたり³⁰⁾、夜の就寝も親といっしょで、いわゆる川の字になって寝る家族も少なくない³¹⁾。英米人は小さいときから独り寝の習慣があるので³²⁾、この話をするときまって驚いた表情をする。幼児が親と一緒に入浴するのもアメリカ人には驚きのようである³³⁾。土居(1971)の言う、「甘え」が日本人の生活に深く根ざしているということではなかろうか。

27) 松尾『国際交流スピーキング』(1983: 210-211)。勝浦も『日本の子育て アメリカの子育て』(1991: 18)で、ランバートの説を引用し、文化の差異より個人差の方が大きい場合があると言う。

28) ドナルド・キーンは、『果てしなく美しい日本』(2002: 82-83)で、親は「「子宝」を艱難から守るためには、いかなる犠牲をも惜しまない」という観察をしている。広岡編『ここが違うよ、日本の子育て』(2002: 64)も、日本人の子育ては子ども中心であると言う。

29) 勝浦(前掲書: 28, 30, 46)

30) 勝浦(前掲書: 73-76)

31) Stapleton: *Beneath the Surface*. (1998: 11)。木村『イギリス交際考』(1984: 45)に、若い日本人の妻が、夫と別の部屋で子どもと一緒に寝起きしている話をして、夫婦が単位と考えるイギリス人の女性を驚かせたとある。

32) 佐藤『イギリスのいい子 日本のいい子』(2001: 44)。小西『遥かなるボストン』(1984: 245)。

33) 勝浦(前掲書: 6, 31, 78)

“Children should be seen but not heard” というような言葉があるように³⁴⁾、英米では、子どもの甘えを許さない育て方をしていると言える。そのためのしつけも、日本とは比較にならないくらい厳しいと言う³⁵⁾。アメリカ人は独立心が旺盛で、子どもがかなり早くから自立していくのも³⁶⁾、幼い時から独立心を養うよう親から教育されるからと言われている³⁷⁾。歴史的には、開拓時代の自主自立の精神に由来するということである³⁸⁾。

アメリカの子どもは、日本の子どものようにだまっけていても親から小遣いがもらえるわけではなく、芝生刈りや洗車などの家の手伝いをしたり、アルバイトをして小遣い稼ぎをする³⁹⁾。それは責任感を植え付け、人間的にも成長し、将来の独立への準備と考えられているからである⁴⁰⁾。新聞配達はアメリカでは男の子の一種の通過儀礼で、早朝に新聞配達をする子どもを気づかう父親がキャデラックでこっそりあとをつけるというような話がまことしやかに語られるのも、子どもの独立精神を培う風土ならではのことと言えよう。

34) 佐藤は(前掲書: 49)、これはヴィクトリア時代の警句で、現代のイギリスでは、幼児の言語による自己主張を重んじる傾向にあるという。外山は『子育ては言葉の教育から』(1984: 164-168)で、このことわざを引用し、聴く習慣がつけられていない日本の子どもが多くなっていることを嘆いている。

35) ベネディクト『菊と刀』(1946: 253-254; 2005: 309-310)。木村(前掲書: 54-56)や中野『アメリカの女たち』(1978: 136-138; 170-174)。広岡編(前掲書: 53, 54, 59)。清水は、『イギリスの学校生活』(1986: 67, 106)で、イギリスの中等学校の朝礼での行き届いたしつけに感心している。ミルワードは『イギリスのこころ』(1979: 136)で、「ピューリタンの家族倫理では、親は子供の教育について厳格そのもので、子供は親の言うことを一切疑わず、絶対に服従しなければならないと教えられた」と言う。勝浦も「アメリカを含め清教徒的な人間観の影響の強い国では、子供は厳しくしつけられる」と言っている(1991: 46)。

36) パール・バック(1966: 111; 2013: 107)

37) Rozman・Kato. *The American Mentality* (1989: 30-32)。能登路(亀井監修『アメリカ』1992: 170)。長沼は『ニューヨークの憂鬱』(1985: 82)で、もし転学や転級で学習部分の欠落があれば自分で補うという、自立主義による自己学習の精神があると言う。

38) 松尾『国際交流スピーキング』(1983: 124-126)や津神『アメリカ人の原像』(1985: 25-26)など。

39) 服部『アメリカに帰りたい』(1985: 95)。広岡編(前掲書: 46)。

40) 加藤・ロズマン『ことばで探るアメリカ』(1988: 126)。

親から支援を受けることができても、大学の学費を自分で稼いだり、教育ローンで学費を払うというような話は珍しくない⁴¹⁾。ROTC(予備役将校訓練課程)で軍事教練を受けながら無償の大学教育に勤しんだり⁴²⁾、軍隊に数年勤め退役したのち、GIビル(復員軍人援護法)で大学教育を受けるための学資を得る者も少なくない。

しかし、現実には、下のブロンディの漫画にあるようなすねかじりもいるようである。仕出し業を営むブロンディに「パーティのテーマは?」と聞かれ、「「新学期を迎えて」です。のんきな夏の日のは忘れ、大人の責任に戻るんです」と言いながら、「ご予算はおいくらくらい?」と訊ねられると、「親が払うんです。たいしたことじゃありません」では、ブロンディがあきれのりも無理はない。



[Blondie. September 15, 1995]

2. 謙虚

「能ある鷹は爪を隠す」や「実るほど頭を垂れる稲穂かな」という諺や格言があるように、一般的に日本人は謙虚で、過度の自信を見せないことが美德とされる。新渡戸が『武士道』の中で、「我国民の間では、自己賞讃は少なくとも悪趣味だと看做されている」と語っていて⁴³⁾、日本人の美質は連綿と受け継がれているようである。謙虚だけならまだしも⁴⁴⁾、家族

41) 中野(前掲書: 17)、三浦『日本語教師の見たアメリカの素顔』(1987: 14)。

42) 中山『大学とアメリカ社会』(1994: 251-255)にROTCの詳しい説明がある。

43) 新渡戸(1905: 154; 1938: 125)。

44) 日本人の謙虚さは、アメリカ人から見れば、「偽りの謙虚さ(false modesty)」や「自分を卑下する(self-effacing)」というように映るかもしれない(Rozman・

をほめずにけなすような言い方も因習としてある⁴⁵⁾。「愚妻」とか「豚児」などの言葉は、昨今ではやや古めかしいかもしれないが、軌を一にする表現ということになるろう。日本人同士なら本音ではなく、儀礼的な卑下や謙遜とわかるが、英米人には正しく伝わらない可能性が大である⁴⁶⁾。

イギリス人については、「自慢することを毛嫌いし、憤み深さを尊ぶ、イギリス紳士」と藤原が賞揚するように⁴⁷⁾、日本の気質を共有しているように見える。例えば、出身大学が有名大学であれば、他人にそれを気付かれないように気を配ると言うし⁴⁸⁾、オックスフォードでは、学生の間でも控えめな表現が好まれるようである⁴⁹⁾。

アメリカでは、子どものときから自己を主張しないとやっていけない環境にあり⁵⁰⁾、しっかり自己表現することを小さいときからしつけられるから、喋ることが好きで、「おしゃべり文化」の国アメリカという見解もある⁵¹⁾。その自己表現が、見せびらかしや自己顕示に繋がるとも言う⁵²⁾。自己の実績に誇りをもち、それを表明することは、客観性があり極端にならなければ許されるという価値観があり、威張れることがあれば素直に威張るアメリカ人は⁵³⁾、控え目と言われるイギリス人とは好対照をなすかもしれない。特に政治家やスポーツマンにこういう傾向が強⁵⁴⁾、普通のアメ

Kato 1989: 18-19)。

45) 木村 『イギリス交際考』(1984: 37)。

46) 西田 『実例で見る日米コミュニケーション・ギャップ』(1989: 154-158) や三浦 『アメリカの物差し、日本の物差し』(1999: 51-52) で、日本人の謙遜や卑下は誤解されやすいと言う。

47) 藤原 『遥かなるケンブリッジ』(1991: 34)。

48) ジョイス 『「アメリカ社会」入門』(2009: 114-115)。オックスフォードやケンブリッジの卒業生は、同胞に出身大学を明かさないといけなくなったら、きまり悪さで身を小さくすると言う。

49) 川上は 『わたしのオックスフォード』(1995: 215) で、「今日は勉強がはかどらなくて」というような謙遜した会話が普通と言う。

50) 服部 『アメリカに帰りたい』(1985: 137)。

51) 亀井 『アメリカ文化と日本』(2000: 46-47)。

52) 亀井 『わがアメリカ文化誌』(2003: 15-17)。

53) 藤原 『遥かなるケンブリッジ』(1991: 34)。

54) Rosman・Kato: *The American Mentality* (1988: 18-19)。亀井(前掲書2000: 47)に、政治家や大統領などの演説を聞いていると、大げさな言葉でとうとう

リカ人でも自分の実績を自慢することはよくあるようだ⁵⁵⁾。よくないことでも素直に表明するアメリカ人という見方もあるので⁵⁶⁾、ある意味率直で正直な国民性と言えるのかもしれないが、英語表現のなかに遠慮的な言い回しや、謙遜的な言い方もあるので⁵⁷⁾、それを操るアメリカ人が自慢家ばかりというはずもなく、果たしてこういう一般化が多くのアメリカ人にあてはまるのかどうか。アメリカの劇作家アーサー・ミラーの *Death of a Salesman* (『セールスマンの死』) にそういう先入観とは相容れない一節がある。

Charley : How do you like this kid? Gonna argue a case in front of the Supreme Court.

Bernard : Pop!

Willy : (genuinely shocked, pained, and happy) No, the Supreme Court .

Bernard : I gotta run . 'Bye, Dad!

Charley : Knock 'em dead, Bernard!

Willy : The Supreme Court! and he didn't even mention it .

[Arthur Miller: *Death of a Salesman*. Penguin .1949 .p.98]

チャーリー : 「どうだい、うちの息子は? 最高裁で論証するんだ。」

バーナード : 「父さん、(やめて)!」

ウィリー : (心底驚き、傷つくが喜ぶ) 「まさか、最高裁だって」

バーナード : 「もう行かないと。またね、父さん」

チャーリー : 「やつらをのしちまえ、バーナード」

ウィリー : 「最高裁だって。一言も言わなかったじゃないか」

としやべりまくり、聞いている方が恥ずかしくなるくらいであると言う。

55) イギリス人のジョイスは『「アメリカ社会」入門』(2009: 182)で、JETプログラム参加者の集会で、アメリカ人の青年がこれまでの業績を誇らしげに聴するのを聞いて、居心地の悪い思いをしたと言っている。

56) 小西『遥かなるボストン』(1984: 76)。

57) 水谷『英語の生態』(1982: 170-180)。

高校まではスーパースターだったが今では放蕩息子に落ちぶれたピフの父親ウィリーと、ピフの高校時代の幼友達バーナード、それからバーナードの父親チャーリーの3人の会話である。バーナードは高校時代までは優秀な学生というわけではなかったが、今では最高裁の法廷に立つ一流の弁護士である。しかし、幼友達ピフの父親ウィリーとの会話では、うだつのあがらない幼友達とその父親を気づかう気持ちもあってか、そのことはおくびにもださない。バーナードの父親チャーリーが息子の自慢をしたことで事実がわかり、ウィリーは驚く。このバーナードの謙虚さは、最高裁で論争するようなやり手弁護士のアメリカ人というイメージとは明らかに違うものである。

3. 「ご結婚おめでとう」

結婚した新郎新婦に「ご結婚おめでとうございます」と言うのは、日本では当たり前過ぎることであるが、「所変われば、品変わる」ということわざどおり、アメリカでは、結婚した花嫁や婚約した女性に対して「おめでとう (Congratulations!)」という言葉は禁句と言われてきた⁵⁸⁾。結婚相手を苦労してやっと見つけたというニュアンスがあるからで、アメリカ開拓時代の、女性が稀少で貴重な存在であり、結婚相手を選ぶのに苦労しなかった時代の名残りでもあるらしい⁵⁹⁾。アメリカ女性のプライドを象徴する文化事象のようであるが、果たしてそうなのかどうか。

ウィリアム・インジーの映画劇 *Come back, Little Sheba* (『愛しのシバよ帰れ』) に、婚約した女性に「おめでとう」と声をかける場面がある。

58) 秋澤『続アメリカ人の英語』(1992: 41)。花婿一人とか新郎新婦が一緒の場合や、祝電を二人に打つときは構わないが、それでも“ I hope you will have a happy life together ”というのが無難のようである。『ジーニアス英和大辞典』にも「花婿にはこれ [Congratulations] を普通に用い、花嫁には通例 I wish you great [every] happiness ./ Best wishes! などと言うとされているが、最近では若い人や親しい間柄では Congratulations! も用いられる」とある。

Marie : Congratulate me, Mrs. Delaney .

Lola : Huh?

Marie : We're going to be married .

Lola : Married?

Marie : Here it is. My engagement ring .

Lola : That's lovely . . lovely.

[partly omitted]

Marie : We've made all our plans. I'm quitting school and flying back to Cincinnati with Bruce this afternoon. His mother has invited me to visit them before I go home. Isn't that wonderful?

Lola : Yes . . yes, indeed .

Marie : Going to miss me?

Lola : Yes, of course, Marie. We'll miss you very much . . uh . . congratulations .

Marie : Thanks, Mrs. Delaney. Come on, Bruce, help me get my stuff .

[William Inge: *Come Back, Little Sheba*. Kinseido .1950 .pp.108-109]

ローラ・デレイニーの家に下宿するマリーは、婚約したことがうれしくて、自分から「おめでとうと言って」と、本来言うてはならないはずのことばを、大家のローラに催促する。「私がいなくなったら、寂しくなります?」と言いながら、婚約指輪を見せている。「もちろんよ。寂しくなるわね . . おめでとう」とやや躊躇しながらローラ。突然のことで言葉に詰まったか、あるいは言うてはならない言葉という意識があったのか。これは約半世紀も前の作品であるだけに、だいぶ昔から、花嫁や婚約した女性に「おめでとう」と言うてはいけないという禁忌が禁忌ではなくなっていることを示しているようである。

59) 津神 『アメリカ人の原像』(1985: 34)。大島 『「風と共に去りぬ」の女たち』(1996: 186-188)。

4 . 嫁に来る

日本人の結婚は、結婚式場の案内で、例えば田中家と鈴木家のご結婚式場とあるように、結婚する当事者よりも家が優先する印象を受ける。また、「嫁に来る、嫁に行く」というような表現も当人同士より、家を重んじる慣習の故であろう⁶⁰⁾。

アメリカ人の場合、結婚は当人同士の問題であり、女性が夫の実家に嫁ぐということや、義理の親と同居するということは、歴史的社会的に考えにくい国柄のようであるが⁶¹⁾、次の『リーダーズ・ダイジェスト』の一節では、「嫁に来る」という表現は存在し、義理の親とも同居しているアメリカ人女性のいることがわかる。

When I came to the farm as a bride, the rock was there, just around the corner of the house. It was an ugly dull orange, about a foot in diameter, and stuck up a couple of inches through the back lawn, waiting to trip me.

“ Can’t we dig it out?” I asked after I hit it full speed with the lawn mower, breaking the blade.

“ No, it’s always been there, ” my husband said, and his father agreed. “ It goes down pretty deep, I reckon, ” my father-in-law added . “ My wife’s family lived here since the mid-1800s. No one’s ever got it out ”

[*Reader’s Digest*. May ,1994 .p.101]

庭の土中深く埋まった岩に、高速で運転していた芝刈り機の刃をあて、刃を折ってしまった嫁が、その岩を撤去できないかどうか、夫と義理の父親とも相談している場面である。嫁は「農家に嫁として来た」と言っていて、義理の親とも同居しているように読める。夫の父親が、自分の女房の家族は1800年代の中頃からここに住んでいると言っているのだから、義理の父

60) 小坂井 『異文化受容のパラドックス』(1996: 109)。飯倉 『日本人のしきたり』(2003: 86)。

61) 亀井 『わがアメリカ文化誌』(2003: 31-32)。

は、婿養子ではないにしても、妻の家に入ったという印象を受ける。

日本人の「家」のような意識があるとは思えないが、夫婦中心の家というより、二世代の家が大家族の家を基盤とした生活を営んでいることが伺える。昔の日本的な風情のする表現であり、家族のようでもある。農作業に人手を必要とする農村ならではのことかもしれないが、工業化社会以前の人間の営みの原風景という気がしないでもない⁶²⁾。

5. 婿養子

日本には、娘しかいない家の家名を残すために、養子縁組した婿を娘の家に養子として迎える婿養子の慣習がある。「小糠三合あったら、婿に行くな」と言うほど辛いものようであるが⁶³⁾、古くからの慣習であり、ベネディクトやキーンに、江戸時代も含め日本の婿養子に関する記述がある⁶⁴⁾。近年、家制度の衰退とともに伝統的な婿養子の制度は減少傾向にあるようであるが、アメリカ人に、日本の婿養子の話をすると決まって驚きの表情を浮かべる。英米では、結婚すると女性は、夫の姓を名乗るのが通例であり、夫が自分の姓を妻の姓に変えたり、妻の実家に同居するなど考えも及ばないことだからであろう。

最近、仕事を持つ女性が未婚時代の姓を、夫の姓の前につける習慣が生まれてきているが(例えば、米国の前国務長官の Hillary Rodham Clinton)、まだそれほど一般的ではなさそうだ。そのアメリカでも、結婚した男が、妻の姓を名乗る希有な事例も存在するようである。アーサー・ヘイリーの小説 *Detective* (『殺人課刑事』) に、次のようなくだりがある。

62) 中根が『タテ社会の人間関係』(1967: 14)で、工業化が世界的にもたらした社会現象のなかでも、とりわけ家族形態が単純化され、夫婦と子供から成る小家族が圧倒的に大きな比率を占めるようになったことが大きな特徴であると言う。それ以前の農村社会では、二世代家族や大家族が家族形態の基本であったと考えてよいのではなかろうか。

63) 飯倉(前掲書: 192)。

64) ベネディクト『菊と刀』(1946: 72-73, 135-136; 2005: 93-94, 167-169)、キーン『果てしなく美しい日本』(2002: 56)。

“ Damn right. The Davanals. I know the address; everyone does. ” In Miami there was no escaping the family name and its fame. Davanal’s department stores were a huge Florida-wide chain. There was also a Davanal-owned TV station which Felicia Maddox-Davanal managed personally. But more than that, the family...was prestigious and powerful, both politically and financially. The Davanals were constantly in the news, sometimes referred to as “ Miami’s royalty. ” A less kindly commentator once added , “ And they behave that way. ”
[text partly omitted]

“ The DOA is Byron Maddox-Davanal, the son-in-law. His wife made the nine-one-one. You know about the name? ”

“ Remind me. ”

“ He was plain Maddox when he married Felicia. Family insisted on his name change. Couldn’t bear the thought of the Davanal name someday disappearing. ”

[Arthur Hailey: *The Detective* . Berkley Books. 1997 . p.319]

フロリダで、ダヴァナルという名前と名声を知らないものはいなかった。ダヴァナル・デパートはフロリダ全州にまたがる一大チェーン店だったし、ほかにダヴァナルが所有するテレビ局もあって、フェリシア・マドックス＝ダヴァナルが個人的に経営に当たっていた。政治的にも財政的にも権勢をほしいままにし、ダヴァナル家はフロリダの王室と言われるほどだった。フェリシアと結婚したときはただのマドックスだったが、一族がダヴァナルに名前を変えることを要求したんだ。その家名が将来絶えるかもしれないということに我慢できずにね。[抄訳]

女性が未婚時代の姓を夫の姓の前につけると上で述べたが、この家系では、マドックス＝ダヴァナルというように、夫マドックスが妻の姓に変え、妻の姓の前に自分の旧姓をつけている。通常アメリカでは起こりそうもない婿養子にまつわる小説の中での話であるが、作家ヘイリーも緻密な取材をした上での創作というから、現実にアメリカにも婿養子は存在するのであろう。

6. 亭主関白

日本は、昔から男尊女卑の国と言われてきたようである。「女三界に家無し」とも「秋なすは嫁に食わずな」とも言われ、女性の地位の低さを物語る言葉でもある。ベネディクトは日本女性の地位の低さを語っているし⁶⁵⁾、バックも地方における女性の地位の低さや、女性に対する男性からの敬意の希薄さを指摘している⁶⁶⁾。ライシャワーやキーンにも同様な観察が見られる⁶⁷⁾。高学歴の女性が多い割には、必ずしも高い地位についていないとハーバード大学でも教えられている⁶⁸⁾。おしなべて、欧米人には、日本女性の地位の低さや立場の弱さが目についたようである。

新渡戸は、日本人の女性の地位については、「社会的政治的単位としては高くはなかつたけれども、妻および母としては最も高き尊敬と最も深き愛情とを受けた」と言っていて⁶⁹⁾、明治時代の外国人の皮相な見方にはすでに異を唱えていた⁷⁰⁾。一見するといかにも男尊女卑のようであっても、実際のところは、表面は男性を立てつつ、実質は女性が強いというのが日本伝統のパタンであるという見方が多い⁷¹⁾。

思うに、古代には卑弥呼という女王が君臨し、飛鳥や奈良時代には推古天皇や持統天皇を始めとする女性の天皇が国を治めていた。平安時代には世界最古の長編小説とされる『源氏物語』を書いた紫式部や、同時代の清

65) 『菊と刀』(1945: 53-54; 2005: 72)。

66) 『私の見た日本』(1966: 97-98, 176, 193; 2013: 77-78, 175-176)。

67) 『ライシャワーの日本史』(2001: 420)。キーン『果てしなく美しい日本』(2002: 55-56, 91-92)。

68) 相馬『ハーバード大学で日本はこう教えられている』(2000: 90)。

69) 『武士道』(1905: 153; 1938: 124)。

70) 夫が妻を「愚妻」などと呼ぶのを見て、妻を軽蔑して尊敬していないという、半解の外国人による皮相の見解がされることを嘆いている(1905: 153-154; 1938: 124)。

71) 勝浦『日本の子育て アメリカの子育て』(1991: 205-206)。荒(亀井監修『アメリカ』1992: 210-211)、新渡戸(1905: 104; 1938: 92)は、洒脱な青年の次の言葉を紹介し、その中に真実があるかもしれないと言う。“American husbands kiss their wives in public and beat them in private; Japanese husbands beat their wives in public and kiss them in private.”但し、これは一世紀以上も前の話である。

少納言や和泉式部、また時代的に前後して、小野小町、藤原道綱母などの女流作家を輩出している。近世武家社会でも、秀吉の妻寧々、土佐の山内千代、加賀の前田まつ、大奥の春日局、天璋院など歴史の裏舞台で、隠然たる力を発揮した女性たちの存在がある。近代では今話題の新島八重や杉本鍼子、大山捨松に津田梅子、樋口一葉や与謝野晶子の名が浮かぶ。現代では緒方貞子を筆頭に、音楽家の西本智実や穠吉敏子、科学者米沢富美子やハーバードで名を馳せた歴史研究の北川智子というような、世界で活躍する傑出した女性が現れている。

社会的にも、古くは、母系社会特有の通い婚が行われていたし⁷²⁾、今日、恐らく多くの日本の家庭の、今風に言えば財務大臣が妻であるというような事実を考えれば⁷³⁾、とても女性の地位が低い国柄とは考えにくいのである。

翻って、イギリス古代史には女性の王は登場しないし、イギリスにおける最初の女流作家の活躍は18世紀まで待たなければならない。また、英米では家計を取り仕切り、妻に生活費や小遣いを渡してきたのは夫と言われている⁷⁴⁾。

それはさておき、アメリカやイギリスでは女性が尊重され、いわゆるレディーファーストの文化という認識が一般的なようである⁷⁵⁾。アメリカは女性の地位が世界でも一番高く、これは開拓時代がほとんど男ばかりの世界で、女性の存在に希少価値があり大切にされた習慣が現在まで残っているからだと言われる⁷⁶⁾。19世紀のアメリカ南部では、白人の有産階級は自

72) 飯倉 『日本人のしきたり』(2003: 87-88)。

73) 勝浦 (前掲書: 206)。テレビアニメ『クレヨンしんちゃん』における主人公の父親、野原ひろしが、妻のみさえに雀の涙(?)ほどの小遣いをもらおうというのが多くの日本人夫婦の有り様ではなからうか。

74) 中野 『アメリカの女たち』(1978: 60)。勝浦 (前掲書: 206)。アントラム 柏木 (1998: 59)。荒 (亀井監修 『アメリカ』1992: 211)。

75) 荒 (亀井監修 『アメリカ』1992: 214)。トレジャ 『アメリカ風俗・習慣・伝統事典』(1987: 3-4; 1992: 5-6)。

76) 津神 『アメリカ人の原像』(1985: 34)。

分たちを「騎士」としてとらえ、騎士たるものは女性を尊重しなくてはならず、南部の女性はたおやかな花として極めて大切にされたという⁷⁷⁾。ただ、女の子は著しく甘やかして育てられるので、幼少の頃から増長する術を心得て成長するアメリカ女性も少なくないという見方もある⁷⁸⁾。イギリスにおいても、騎士道に由来する女性尊重の気風が一般的なようである⁷⁹⁾。

こういう女性への崇拝や尊敬とは裏腹に、女性軽視の現実も垣間見える。女性尊重の裏には「隠された狙い」があり⁸⁰⁾、表面的には女性に敬意を払うが、現実には男の力が強く⁸¹⁾、アメリカ南部でも、女性は敬愛されるが、支配するのは男性であると言われる⁸²⁾。他人の前ではちやほやしても、二人だけになるとそっけないアメリカ人の夫という観察をする人もいる⁸³⁾。そういう見えにくい現実を裏付けるかのような、地域や時代、個人もあったことが、次に紹介するアメリカとイギリスの事例からわかるであろう。

映画 *Kentucky Woman* (『ケンタッキーの女』) を初めて見た時の驚きは今でも忘れがたい。舞台となるのは米国ケンタッキー州のとある炭鉱町における、ある家族の日曜日の正餐でのこと。家族だけでなく友人も同席した食事の際、男性達がまず食卓につき、食事中、女性陣は立っての給仕役が慣例らしい。

77) 松尾『不思議の国アメリカ』(1888: 119)。大島『「風と共に去りぬ」の女たち』(1996: 139)。

78) 中野(前掲書: 164-165)。

79) 山田『イギリス人の表と裏』(1993: 33-35)。深田『あざやかな悪妻たち』(1983: 246)で、イギリスの男性会社員数名と女性秘書が食事をした際、お手洗いに立った女性秘書が戻ってくると、男たちが一斉に立ち上がり直立不動の敬意の姿勢を取り、慣れない深田は戸惑ったらしい。

80) トレジャは(前掲書: 5-6)、「女性を祭り上げて幼児化してしまい…女性はその労働はできないのだから、労働に対して、十分な報酬は払われる必要はないという、(男性にとって)都合のよい虚構が維持されてきた」と言う。

81) 山田は(前掲書: 35-37)、「ヴィクトリア時代には、女性への表面的崇拝の姿勢が過度に発生し…女性崇拝が女性の自由を奪い、最終的に男性社会を確立させ…女性を尊敬するポーズをとるが、男の権力は絶対的であった」と言う。深田(前掲書: 123-124)にも、「日本の大正生まれの亭主顔負け」の、欧米の強い夫の話が紹介されている。

82) 大島『「風と共に去りぬ」の女たち』(1996: 142)。

83) 小西『遥かなるボストン』(1984: 156)。

大都会ボストンからやってきたウォードがこの古風な習慣に首を傾げ、「女性も一緒に食卓につきましょう」と一家の主人ビルに提案するのが、次のくだりである。

Mennifer Telford: Bill, folks, dinner's ready .

Everyone: Yes, ma'am .

(Everyone including boys go into the house .)

A man: Smells good . . . Come on, boys. Down here where I can keep my eyes on you.

Bill Telford: Take a seat, Mr. Ward .

Ward: Thank you . (a pause) Mrs. Telford, can I give you a hand?

Mennifer: A hand? (skeptically and flatly) No, thank you.

Bill: Sit down, Mr. Ward. We don't need no help. We do it every Sunday.

Ward: Mr. Telford. Need more chairs?

Bill: Chairs?

Ward: I'm afraid I'm crowding women from the table.

Bill: Oh, they eat after we git finished .

Ward: Might I wait as I haven't had much chance to talk to them?

A man: He ain't from these parts, Billy . (a pause) Boston .

Bill: Boston?

Ward: Yes, sir?

Bill: How do they do it there?

Ward: Well, on Sundays we usually eat together .

(Bill thinks for a little while. The girls, together with the men and boys, are staring expectantly at Bill, their father .)

ボストン出身のウォードは、いつもの癖からか、女主人メニファーに「(配膳の)お手伝いしましょうか」と声をかける。メニファーは、「手伝い?」といぶかしげな顔をしたあとで、男子厨房に入るべからずとでもいうのか、「結構です」ときっぱり。

ワードは、テーブルに着こうとするが、女性用の椅子が足りないことに気づき、「まだ椅子ありますか?」とビルに聞く。「椅子だって?」「女性たちを締め出しているようですから」とワード。「女は、男が食べ終わってから食べるんだ」とビル。友人が「彼は、このあたりの者じゃないんだ...ポストンだよ」「ポストン? 向こうではどうやって食事をするんだ」というビルの問いに、「日曜日はみんな一緒に食事をするんです」とワード。主人のビルはちょっと考え込む。男たちも女性陣もビルがどう出るか注視している。[抄訳]

Bill: Well, let's get them other chairs.

A daughter: (cheerfully) All right!

Bill: OK, boys. Ladies, get your plates and bring 'em on in here. OK, we're gonna git down together .

Bill: (to his wife, standing beside him.) What are you waiting for, Mennifer? Set yourself down!

(Mennifer, hesitantly but grinning, sits down.)

Bill: (Slightly annoyed but talks to his wife after she sits down.) I'd like another beer, Mennifer.

Mennifer: (About to stand up, but thinks twice.) You'll find it in the icebox, Billy.

(Bill, taken aback, begins to cough and so does another man. They keep coughing. Everyone is staring at Bill to see what he is going to do. Bill decides to go get beer from the fridge.)

Bill: (After coming back, asks if anyone wants a beer.) Anybody else? (Ward shakes his head.) Mennifer, would you like a beer?

Mennifer: (Smiling) I don't mind if I do, Bill.

[The script, partly omitted, was re-created by the present author]

「それじゃ、女たちにも椅子を用意しよう」とビル。娘の一人がうれしそうに「いいわね!」。ビルは奥さんのメニファーに「何してるんだ。さっさと座らないか」とやけ気味に促すと、妻は複雑な表情を浮かべながら椅子に座る。いつも

の癖で奥さんに「ビールをくれないか」とビール。立ち上がりかけた妻メニファーは思い直し「アイスボックスにあるわよ」とびしゃり。

皆が注視するなか、ビルはしぶしぶ複雑な気持ちでビールを取りに行く。戻ってくると、「だれかいらないか?」とビールを薦めるがウォードは首を横にふる。今度は「メニファー、ビールどうだい」と言うと、妻は、うれしそうに「いただくかしら」と応じる。[抄訳]

男性中心だった食卓から、男女平等の正餐に様変わりしたという場面である。アメリカの田舎町では亭主関白然とした男性の存在があり、女性がいそいそと仕えていたことがわかる。

イギリスの作家サマセット・モームの *Of Human Bondage* (『人間の絆』) にも同じく保守的な男性ソープ・アセルニーが登場する。アセルニーの家に食事に招待された主人公フィリップは、将来の妻となるアセルニーの娘サリーに給仕してもらいながら、いかにも亭主関白風のアセルニーと食事をする場面である。この作品を原作とする映画があり、原作と映画の脚本で若干異なっているところがあるので、両方を次にあげる。

[原作]

Athelny and Philip installed themselves in the great monkish chairs, and Sally brought them in two plates of beef, Yorkshire pudding, baked potatoes, and cabbage. Athelny took sixpence out of his pocket and sent her for a jug of beer .

“ I hope you didn't have the table laid here on my account , ” said Philip , “ I should have been quite happy to eat with the children . ”

“ Oh no, I always have my meals by myself. I like these antique customs. I don't think that women ought to sit down at table with men. It ruins conversation and I'm sure it's very bad for them. It puts ideas, and women are never at ease with themselves when they have ideas . ”

[Somerset Maugham: *Of Human Bondage*. Digireads.com .1915 .p.289]

[脚本]

Thorpe: Indeed! I believe in living the old way. It is my theory that people in those days got more -

Sally: Papa! Mother says you're to stop talking. Dinner's ready, and I'm to bring it when you sit down .

Thorpe: Here, come and shake hands with Mr. Carey. Isn't she enormous? She's my eldest.

Sally: Come on, Father, sit down at the table .

Philip: Well - er - won't we wait for Mrs. Athelny?

Thorpe: I always have meals by myself. I don't think women ought to sit at table with men. It puts ideas in their heads. And women are never at ease with themselves when they have ideas. Now, then, what's first, Sally?

Sally: The Yorkshire pudding, Father .

[*Of Human Bondage*. Gogaku Shunjusha .1972 .pp.42-43]

フィリップが「奥さんを待たなくていいんですか?」と聞くと、アセルニーは「私はいつも一人きりで食事をしています。こういう古風な習慣が気に入っているんです。女が男と一緒に食事をするものじゃないですよ。会話を台無しにするし、何かと考えを持ちますからね。女がいろいろ考え出すと、落ち着かなくなるんです」[抄訳]

アセルニーは、まるで日本の戦前の男を彷彿させるかのような台詞を吐いている。これは1915年の小説であるから、およそ一世紀前のイギリスを舞台にしていることになる。一世紀も前の時代のイギリスには、男があたかも亭主関白のように振る舞い、女性が甲斐甲斐しく給仕するというような風習があったのであろうか。

7. 学歴社会

日本はいわゆる学歴社会で、有名大学や一流大学に入学することが、将来の地位や高給を得るための登竜門であり、どういう学部でどういう能力を身につけたかというより、どういう大学を出たかでその後の人生が左右

されるというような社会であると言われてきた⁸⁴⁾。

パール・バックも、日本の「トップ六大学」の存在を認知しているし⁸⁵⁾、ライシャワーやキーンも学歴が幅を利かす社会であることを認めている⁸⁶⁾。ヴォーゲルも、有名大学に入ることは一生にかかわることなので生徒も受験に身を入れると見ている⁸⁷⁾。元ソニー社長の盛田昭夫氏は『学歴無用論』を著しているが⁸⁸⁾、これは取りも直さず、日本が学歴社会であることの裏返しであると言えるし、学歴社会意識が強いからこそ、塾や予備校がこれだけ繁栄しているのであろう。職場に学閥ができるとか⁸⁹⁾、霞ヶ関の高級官僚の7割が東大卒である⁹⁰⁾、というような現象はアメリカでは考えられないことのように思われる。子どもの担任が自分より偏差値の低い大学出身とわかると蔑んだ態度をとる親がいる⁹¹⁾、というのも現代日本特有の病弊ではなからうか。

イギリスの場合は、学歴社会を云々する前に、この国は伝統的に階級社会であることを認識する必要がある。中等教育レベルでは、階級ごとに異なる学校選択が行われる傾向が強かったり、学校内部の能力別学級編成で、階級間の格差が現れるようになってきている⁹²⁾。大学レベルでは、教育の

84) 例えば、麻生『日本の学歴エリート』(2009: 263, 271)。栄は『国際化時代の子育てを考える親へ』(1993: 40)で、有名大学を出て大企業に就職することが一生を保証してくれるという神話も崩れてきているとすでに言っている。

85) パール・バック(1966: 111; 2013: 107)は東大、京大、慶応大、早稲田大、東工大、一橋大をあげている。

86) ライシャワー『ライシャワーの日本史』(1990: 263; 2001: 389)、キーン『果てしなく美しい日本』(2002: 85-86, 200-202)。

87) ヴォーゲル『ジャパニアズナンバーワン』(1979: 163-164; 1979: 194-195)や『ジャパニアズナンバーワン - それからどうなった』(2000: 90-91; 2000: 170-171)。

88) 盛田『学歴無用論』(1987)。

89) 直塚『欧米人が沈黙するとき』(1980: 107)、天野『学歴の社会史』(1992: 244-255)。

90) ヴォーゲル『ジャパニアズナンバーワン』(1979: 51; 1979: 81)、麻生(前掲書: 201-202)は、昭和30~40年代にも東大卒が約7割という統計を示している。戦前も、高級官僚の7割は東京帝国大学の法学部出身であったと言う。さらに東大卒のビジネスエリートの寡占率は欧米でも類を見ないと言う(前掲書: 32)。

91) 小林『ニッポンの大学』(2007: 98)。

92) 荻谷『大衆教育社会のゆくえ』(1995: 44-45)。

特権が階級的に独占されていて、「階級の文化的再生産」が行われているとか⁹³⁾、「高学歴は再生産される」という見方もある⁹⁴⁾。近年、大学教育の拡大により⁹⁵⁾、階級社会の様相はかなりの変貌をとげてきているようであるが、それでも、階級間の大学へのアクセス・ギャップはなかなか縮まらず⁹⁶⁾、教育において階級の固定化現象があるとも言われる⁹⁷⁾。

能力がすぐれていても、学歴社会の悲しさで、イギリスの会社では昇進の道が閉ざされ、閑職に甘んじていたところを日本企業に採用され、ロンドン支店次長を長らく勤めたというようなイギリス人の話もある⁹⁸⁾。とは言うものの、官庁であれ企業であれ、学歴で出世の度合いが決まってしまうということはなく、「現場からのたたき上げ」で、官公庁・大企業のトップになる人も結構いるということであり⁹⁹⁾、学歴と実力の共存する社会ということになるのであろう。

アメリカは学歴にはあまりこだわらない実力主義の社会であると認識されてきたようである¹⁰⁰⁾。ソニーの盛田元社長もその著書の中でアメリカの実力主義に言及している¹⁰¹⁾。有名大学へのこだわりがあまりなく、大学を選ぶのはランキングではなく、何をやりたいか、何を身につけたいかで選ぶと言われる¹⁰²⁾。

アメリカの大統領を例にとれば、歴代の大統領の出身大学を見ても、必ずしも、いわゆるエリート校出身者が大勢を占めるというわけではな

93) 苅谷 『イギリスの大学・ニッポンの大学』(2012: 85-86)。竹内 『パブリック・スクール』(1993: 11, 85-91)。

94) 瀬々 「日米英で法学教育を受けて」(ICS 国際文化教育センター編 『私の海外留学体験記』所収 1995: 213)。

95) 苅谷 『イギリスの大学・ニッポンの大学』(2012: 100)。

96) 苅谷 (前掲書: 106)。

97) 片野・須貝 『こんなにちがうヨーロッパ各国意識』(2012: 26-28)。

98) 深田 『われら海を渡る』(1984: 38)。

99) 林 『イギリス型 豊かさの真実』(2009: 156)。

100) 藤原 『祖国とは国語』(2006: 80)。

101) 盛田 『学歴無用論』(1987: 28, 36, 60-61など)。

102) 橋 『アメリカの大学教育の現状』(2004: 171-172)。

い¹⁰³⁾。丸太小屋に住んでいた貧困家庭出身だからこそ大統領になれたという「丸太小屋伝説」さえあり¹⁰⁴⁾、上流階級出身であっても、わざと丸太小屋育ちを演出する傾向があるというほど¹⁰⁵⁾、学歴や氏素性は、社会での成功とはあまり関係ないと考えられてきたようである。これは、「アメリカンドリーム」とか‘rags to riches’（「裸一貫から大金持ちへ」）というような言葉に端的にあらわれている。また信念を持ってことに当たりさえすれば、階級や人種に関係なく成功するという「ホレイショ・アルジャー神話」も今なお生き続けていると言う¹⁰⁶⁾。

ただ、近年、アメリカも時には日本以上の学歴社会であるという、アメリカで働く日本人の見解もあるが¹⁰⁷⁾、これは、あくまで実力を前提とした学歴ということで、実力学歴社会ということではなからうか。経済社会自体が専門化や情報化、国際化で複雑化し、高度の専門知識や学識が必要という時代なのかもしれない。麻生は「機能的学歴社会」と呼んでいる¹⁰⁸⁾。

ジョン・グリシャムの小説 *The Firm* (『法律事務所』) の中に、アメリカでも、出身大学を、しかも序列を意識している場面がある。

“ Mitchell McDeere? ” he asked with a huge smile and a hand thrust forward.

“ Yes. ” They shook hands violently.

“ Nice to meet you, Mitchell. I’m Lamar Quin. ”

103) 戦後の大統領12名中、アメリカの大学上位10校(中山1994: 173-174参照)の出身者は、次の3名のみである。ケネディ(ハーバード大学) ブッシュ(イエール大学) ブッシュ・ジュニア(イエール大学)

104) 亀井・藤岡(亀井監修『アメリカ』1992: 184)に、「丸太小屋からホワイト・ハウスへ」という言葉は、長い間、アメリカのモットーのように用いられた」とある。

105) 松尾『不思議の国アメリカ』(1988: 87)

106) ジョイス『「アメリカ社会」入門』(2009: 92)

107) 新美『バンク・オブ・アメリカ副頭取...』(1987: 23)。庄子『ママはアメリカの弁護士さん』(2000: 24)。和田(2009)も、近年の国際社会化のなかでアメリカも学歴社会になっていると言う。

108) 麻生(前掲書)によれば、アメリカではビジネスエリート¹⁾の44%が修士以上の学位を持っている(p.35)。また、学歴とは専門的な職業能力を証明する学位と言う(p.262)。

“ My pleasure. Please call me Mitch. ” He stepped inside and quickly surveyed the spacious room .

[partly omitted]

“ What position did you play? ” asked Lamar, in the direction of less sensitive matters .

“ Quarterback. I was heavily recruited until I messed up a knee in my last high school game. Everyone disappeared except Western Kentucky. I played off and on for four years, even started some as a junior, but the knee would never hold up. ”

“ How’d you make straight A’s and play football? ”

“ I put the books first. ”

“ I don’t imagine Western Kentucky is much of an academic school, ” Lamar blurted with a stupid grin, and immediately wished he could take it back. Lambert and McKnight frowned and acknowledged the mistake .

“ Sort of like Kansas State, ” Mitch replied. They froze, all of them froze, and for a few seconds stared incredulously at each other. This guy McDeere knew Lamar Quin went to Kansas State .

[John Grisham: *The Firm*. Random House .1991 .pp.2-6]

法科大学院（Law School）出身の主人公ミッチは法律事務所の就職面接を受ける。初対面の挨拶を終えて.. 面接者の一人ラマーが差し障りのないアメリカンフットボールの話を持ち出す。ミッチは、「クォーターバックをやっていて、大学のスカウトもかなりあったんですが、高校最後の試合で膝を痛めたんです。最後までスカウトに来てくれたウェスタン・ケンタッキー大学に進学し、大学でもそこそこ活躍したんですよ」と説明する。

「どうやってフットボールをしながら、オールAを取ることができたんだい」とラマー。「まず勉学第一だったんです」と答える主人公。「じゃ、君の行ったウェスタン・ケンタッキー大学は学問的にそれほどでもないんだらうね」とラマー。

この失言を受けて、「カンサス州立大学みたいなものですよ」と、ラマーの出身大学を引き合いに出して切り返す。面接官らは信じられないという顔をする。

[抄訳]

主人公ミッチが面接官についての下調べをしていたことを瞬時に知らしめ、彼らを凍りつかせたというくだりである。大学ランキングについての意識が希薄なわけではなく、地方の無名大学を揶揄する発言があり、日本人の大学序列意識をも彷彿とさせる会話である。

8. 企業城下町

日本の企業は終身雇用でかつ年功序列が一般的であり、従業員の会社に対する忠誠心は強く、会社は従業員を家族のように遇すると言われてきた¹⁰⁹⁾。「従業員の社宅があり、会社で生け花や茶道を教えてくれ..温泉地やスキー場には従業員のための寮があり..会社と従業員の結びつきは、家族主義的」と言われるほどである¹¹⁰⁾。イギリスにある日本企業でも、現地採用のイギリス人社員が家族のような待遇を受けているという話もある¹¹¹⁾。また別の日本企業では、現地のトラック運転手が、意欲と能力を買われて昇進を重ね、ついに重役に昇格したという、階級社会のイギリスでは考えられないような逸話もある¹¹²⁾。

近年、不況のあおりで、いわゆるブラック企業なるものが跋扈する世辛い世の中になり、この日本的雇用形態も壊れつつあるかもしれないが、日本的経営法が再評価されているとも聞く¹¹³⁾。日本を代表する企業トヨ

109) 板坂 『ああアメリカ』(1973: 59, 62-64)、ホール 『文化を越えて』(1976: 64; 1979: 78) やヴォーゲル 『ジャパニーズナンバーワン』(1979: 46; 1979: 70)、Reischauer, *The Japanese Today* (1988: 320) の外国人による観察もある。相馬 『ハーバード大学で...』(2000: 81-82) や藤原 『この国のけじめ』(2006: 22) にもそれぞれの視点からの観察がある。

110) 板坂 『ああアメリカ』(1973: 66)。

111) イギリス在住の高尾は 『イギリス人はおかしい』(1998: 172-174) で、ある日本企業で、現地採用のイギリス人社員たちが、日本人重役の使う立派な部屋で、重役や上司と一緒に家族のように昼食をとっている話を紹介している。

112) 深田 (前掲書: 50)、ファスナーの吉田工業がアメリカ的能力主義と日本的人情論の組み合わせで成功をおさめているようである。

113) *The Art of Japanese Management* の著者 Pascale・Athos は日本で嫌われはじめて「会社人間」や、職場での相互依存的、密接な人間関係、さらにそれらを助長する傾向の強い文化的体質を高く評価している、と三浦は言う(『アメリカの物差し、日本の物差し』1999: 53-57)。

タは日本的経営を標榜し、人間を尊重する「トヨタウェイ」を貫いているし¹¹⁴⁾、株主よりも社員を大事にする会社は少なくないであろう。

アメリカでは、終身雇用は一般的でなく転職はあたりまえで¹¹⁵⁾、退職するまでに6、7回は転職するという¹¹⁶⁾。会社に対する忠誠心もなければ、職場での連帯感もないと言われ¹¹⁷⁾、一時解雇や首切りは珍しくない¹¹⁸⁾。近年日本選手が活躍する大リーグでのトレードは壮絶で、トレードされたその日のうちに新チームの試合に出場する選手もいたようだ¹¹⁹⁾。過去の話かと思いきや、マリナーズからヤンキースに電撃的に移籍した、わがイチローが今年それをやってのけたことは記憶に新しい。日本に比べると、帰属意識が希薄な社会と言えるかもしれない。

それでは、アメリカの会社経営は企業論理優先でまったく情に欠けるかというところでもなく、大企業でも雇用優先のところは少なくないし¹²⁰⁾、小企業や地域に密着した企業では日本的雇用をうかがわせる場合もあるようだ。次の『ナショナル・ジオグラフィック』の記事の一節を読むと、従業員を家族のように手厚く処遇する企業があることがわかる。

114) 梶原 『トヨタウェイ』(2002: 173-174)。

115) 亀井は『アメリカ文化と日本』(2000: 59-60)で、身分社会のアメリカでは転職によって階級的にも上がると言う。

116) Cohen: *Spotlight on America and Japan* (2013: 34)。外山は『子育ては言葉の教育から』(1984: 19-20)で、「転石苔むさず」という諺の、イギリスとアメリカでの意義の変化を引き合いに出し、アメリカは有能な人ほど職を変える社会であると述べている。

117) 小西 『遥かなるボストン』(1984: 156)。

118) 名作映画『ローマの休日』で、仕事でへまをした主人公ジョーは、上司に、“Am I fired?”(「私、首ですか?」)と訊く場面があり、アメリカ人の職場での解雇が珍しくないことをうかがわせる。フィオリーナ『わたしはこうして...』(2006: 63-64; 2007: 72-73)には、上司である主人公の指示に従わない部下をあっさり解雇する記述がある。また、リーダーの仕事として、まず、“A boss can hire and fire.”(「上役は雇い、辞めさせる」)とある(2006: 132; 2007: 150)。新美(1987: 158)も、「役にたたないと見れば...体よくクビにになってしまう」と言う。ウォード『ビジネスマンの父より...』(1985, 1989)で、社員の解雇の仕方を息子に指南する章があるほどである。

119) 福島 『大リーグ物語』(1991: 149-150)。

120) 梶原 『トヨタウェイ』(2002: 174)。

For years the town nestled warm and snug in the embrace of a cotton mill. The mill owned houses and rented them cheaply to workers, ran a company store, the school, the water system. It fixed leaky roofs. Painted fences. In hundreds of towns across the Piedmont, whatever the problem, the mill took care of it...

[partly omitted]

“ How had the town held together through the bad times? ” I asked. She thought awhile . “ Well now, Cooleemee was always like one big family, ” Mable said finally.

[*National Geographic*. March ,1995 .pp.122-126]

長年、町は綿花工場に心地よく抱かれてきた。町の綿花工場が住宅を所有し、それを従業員に安く貸付け、学校、店、水道を管理し、雨漏りの修理から、垣根のペンキ塗りまですべて面倒みるという。ピードモントの何百もの町では、問題が何であれ、工場が後始末した。ある従業員に、「不況のときはどうやって支えあったんですか」と質問すると、「クーラミーはいつもひとつの大家族のようだったのよ」と答えている。[抄訳]

企業が社員の家庭に対して、住宅、学校、水道の管理から、住宅の補修繕まで手がけ、至れり尽せりの住環境や福利厚生を提供している。まさに、日本の企業が従業員の社宅の襖の張り替えや畳替えまで面倒を見てくれ、社内運動会を開催して、社員の健康管理を気遣うとともに家庭的な雰囲気醸成するという、いわゆる企業城下町という趣ではなからうか¹²¹⁾。

9 . 恩

被った恩に報いる義理堅さというのは日本人の美德のひとつであると思

121) 残念ながら、“ Throughout the Piedmont the paternalism of family-owned mills yielded to big corporations. Efficiency ruled. Layoffs and plant closing followed. ” と話が続き、この企業も時代の波に飲まれて大企業に買収され、効率で支配し、一時解雇や工場閉鎖があったという悲しい結末に終わったようである。

われる。徳川家への恩と義に奉じ、理不尽にも朝敵という汚名を主君松平容保に着せた薩長に一矢を報いようと敢然と立ち向かい、見事に散った会津、と藤原は讃える¹²²⁾。「恩」は日本人の生活の中に深く根ざしている。親の恩、恩人、恩師、恩に着的、恩返し、恩赦、恩給、報恩、厚恩、と思いつくだけでもこれだけある。御恩奉公という言葉は鎌倉時代からすでにあったし、戦前の小学校2年の教科書に載っている「オンヲ忘レルナ」という忠犬ハチの話をベネディクトが紹介してもいる¹²³⁾。逆に、恩に着的、恩を売る、恩知らず、恩を仇で返す、のように本来あるまじき言葉があるのは、それだけ恩ということが日本人の日常に、よかれあしかれ、密接に関わっているということであろう¹²⁴⁾。

アメリカ人には、親への恩というのは、親に対して優しくするという以上のものではない、とベネディクトは言う¹²⁵⁾。日本語の「恩」という言葉は、英語の‘indebtedness’や‘obligation’では表現出来ないとも言っている¹²⁶⁾。感謝をあらわす‘Much obliged’にも、相手に対して何かを負うという含意はなさそうである。

アメリカに滞在する日本人主婦が、アメリカ人の友人に贈り物をして、喜んでお礼を言ってくれるのはそのときだけで、次に会っても贈った物のことは忘れてしまっているかのようで、アメリカ人は恩知らずだという気持ちになったという話が紹介されている¹²⁷⁾。ハワイの日系人は、本土の

122) 藤原 『この国のけじめ』(2006: 17)。

123) 『菊と刀』(1949: 100; 2005: 123-124)。

124) これほど、恩にまつわる言葉がある以上、サピア・ウォーフ仮説(言語相対説)が唱えるように、言葉によって日本人の行動原理が規定されているという気がしてくるのである。板坂は『日本人の論理構造』(1971: 175)で、「言語行動と結びついた行動様式は…根強くわれわれの肌の色のようにつきまとうものである」と言っているし、青木は『異文化理解』(2001: 7)で、「人間の生き方は文化によって深く規定されている」という言い方をしている。鈴木の『ことばと文化』(1973: 31)や『日本語と外国語』(1990: 第2章)にもその言及がある。

125) 『菊と刀』(1946: 100; 2005: 126)。

126) 『菊と刀』(1946: 99-100; 2005: 122-123)。

127) 直塚 『欧米人が沈黙するとき』(1980: 36-37)。

日系人を見て「白人みたいな行動をとり、人情がない」と感じているし¹²⁸⁾、人間関係では「恩や義理が大事」とも言っている¹²⁹⁾。アメリカ人は必ずしも日本式の恩や義理に縛られるわけではないので、これは文化的差異に根ざす行動原理の違いというしかないが、アメリカ人にも日本的な心情をもつ時代や地域、個人が存在することが次の例からわかる。

アメリカの小説家ハロルド・ロビンズの、20世紀初頭のウェスト・ヴァージニアを舞台として始まる小説に、姉と一緒に仕事を探しに山から町へ降りて来た純真朴訥な青年ダニエルが登場する。町まで数十キロの道のりを姉と歩いて行く道すがら、体調を崩した姉モリー・アンを通りすがりの馬車に乗せてもらう。町に着くと、馬車の御者ジミーとダニエルが次の会話を交わしている。

“ Got a place to stay? ” Jimmy asked . “ Any kinfolk? ”

“ No, ” Daniel answered .

“ I kin fix you up at my place, ” Jimmy said . “ The Widdy Carrol runs a fine boardin’ house . ”

They looked at each other hesitantly .

“ She won’ charge you nothin’ fer the night, ” Jimmy said quickly . “ Y’all are my guests . ”

“ We kin pay, ” Daniel said as quickly . “ We got money. It’s jes’ that we wanted to git to work as soon as we could ”

[partly omitted]

“ Y’all come over to the Widdys with me. You’ll git some supper an’ a bed an’ you kin be here fust thing in the mornin’ . ”

Daniel met his eyes . “ We don’ want to put nobody out. We’re already obliged to you for your favor . ”

[Harold Robbins: *Memories of Another Day*. NEL paperback .1980 .pp.52-53]

128) 高木 『日系アメリカ人の日本観』(1992: 23)

129) 高木: 前掲書 (1992: 112-113)

「泊まるところはあるのかい。親戚はいるのか」とジミー。無ければウィディ・キャロルの下宿屋に泊まれると言う。ダニエルと姉のモリー・アンはためらいがちに顔を見合わせる。

「金はとらんよ。君たちは俺の客だ」と言うジミーに、「金は払います」とダニエル。

「君たち、俺と一緒にウィディ家に来なよ。食事とベッドにありつけるぞ」

「あなたの好意にはもうすでに恩がありますから」[抄訳]

馬車に乗せてもらったジミーの好意に対して、日本人が言うような恩義を感じているという表現をしている。これ以上好意に甘えるわけにはいかないと、遠慮が言外にある¹³⁰⁾。ダニエルのこの‘obliged’には、現代英語で単に感謝を意味する‘Much obliged’以上の、「恩に着る」という意味が込められていると言ってよいのではなかろうか。というのは、町へ行く前に母親から次のような心構えを聞かされていたからである。

“ We don’ want people to think we live like pigs jes’ because we’s mountain people. We got a good name, old an’ proud as any, an’ I don’t want them to fergit it. ”
[p.45]

「山暮らしの田舎者だからといって、みすぼらしい生活を送っているわけじゃない。由緒ある名前も誇りもあることを、忘れてもらってほしくない」と母親は言う。恥ずかしいことをして人様に笑われるようなまねだけはするなどでも言いたげな母親の言葉である。母親のこの言いつけに従おうと思えば、ダニエルが、これ以上恩を被るわけにはいきませんというような、日本的な心情の言葉を吐くのも納得できるのである。

二十世紀初頭のアメリカの田舎に住む純朴な人達には、こういう他人の好意に対して恩を感じ、また遠慮をするというような心情があったのではなかろうか。もしかすると、そういう心情は洋の東西を問わず、近代社会

130) 土居が「相手の好意に甘え過ぎてはいけなから遠慮するのである」と言うように(1971: 39)、まさに日本人と同じ思考様式ではなかろうか。

以前の諸民族の人々の心根に通底する心情であったかもしれない。商工業化が進み都市文明が支配していく世界で、個人主義や金銭崇拜が個別の伝統文化やその慣習を脅かし¹³¹⁾、論理と合理の市場主義が民族の心情とは合入れないものを祭り上げ、古い美質をかなぐり捨てさせているのが¹³²⁾、今の世の中のようなのである。

そういうご時世の中で、ロンドンに在住し日本企業に勤め、英語を母語のように操りながらトップダウンで物事を差配し、なおかつ日本の義理や人情の価値を信じてそれを押し通し、それ故に、欧米の人達にこよなく愛された日本人がいたということは¹³³⁾、きわめて示唆に富むことのように思われる。畢竟、「国際的に尊敬される人とは、自国の文化、伝統、道徳、情緒などをしっかり身につけた人¹³⁴⁾」なのではなからうか。

参考文献

- Benedict, Ruth . 1945 . *The Chrysanthemum and the Sword*. Boston & New York: Houghton Mifflin . (ルース・ベネディクト・長谷川松治訳 . 1972¹⁾・2005²⁾ . 『菊と刀』講談社 .)
- Buck, Pearl . 1966 . *The People of Japan*. New York: Simon and Schuster . (パール・バック・小林政子訳 . 2013 . 『私の見た日本』国書刊行会 .)
- Cohen, Joshua . 2013 . *Spotlight on America and Japan* . 南雲堂 .
- Fiorina, Carly . 2006 . *Tough Choices - A Memoir*. London: Penguin Books . (カーリー・フィオリーナ・村上章子訳 . 2007 . 『私はこうして受付から CEO になった』ダイヤモンド社 .)
- Hall, Edward T . 1959 . *The Silent Language*. Garden City, NY: Doubleday .

131) クレーマー (伊佐監修 『多文化社会と異文化コミュニケーション』2007: 96-116, 第5章) , ミルワード 『イギリスのこころ』(1979: 136-137) ,

132) 鈴木 『日本語は国際語になりうるか』(1995: 23) , 藤原 『この国のけじめ』(2006: 13) ,

133) 深田 『われら海を渡る』(1984: 10-57 「東方の人」) で、日航欧州支配人千田 図南男氏の豪放磊落な人生を紹介している。

134) 藤原 『この国のけじめ』(2006: 192) ,

- (エドワード・T・ホール・國弘正雄他訳・1966・『沈黙のこぼれ』南雲堂・)
Hall, Edward T. 1966. *The Hidden Dimensions*. Garden City, NY: Doubleday.
(エドワード・T・ホール・日高敏隆・佐藤信行訳・1970・『かくれた次元』
みすず書房・)
Hall, Edward T. 1976. *Beyond Culture*. Garden City, NY: Doubleday. (エドワー
ド・T・ホール・岩田慶治・谷泰訳・1979・『文化を超えて』TBSブリタニカ・)
Nitobe, Inazo. 1905. *Bushido*. New York: G. P. Putnam's Sons. (新渡戸稲造・矢
内原忠雄訳・1938¹・1974²・『武士道』岩波書店・)
Reischauer, Edwin O. 1988. *The Japanese Today*. Tokyo: Tuttle.
Reischauer, Edwin O. 1990. *Japan: The Story of a Nation*. New York: McGraw-
Hill. (エドウィン・O・ライシャワー・國弘正雄訳・2001・『ライシャワーの
日本史』講談社・)
Rozman, Masha and Kyoko Kato. 1989. *The American Mentality*. マクミラン・
Stapleton, Paul. 1998. *Beneath the Surface*. 成美堂・
Tuleja, Tad. 1987. *Curious Customs*. New York: Stonesong Press. (タッド・ト
レジャ・北村弘文訳・1992・『アメリカ風俗・習慣・伝統事典』北星堂書店・)
Vogel, Ezra. 1979. *Japan as Number One*. New York: Harper & Row. (エズラ・
ヴォーゲル・弘中和歌子・木本彰子訳・1979・『ジャパニアズナンバーワン』
TBSブリタニカ・)
Vogel, Ezra. 2000. *Is Japan Still Number One?* Selangor DarulEhsan, Malaysia:
Pelanduk. (エズラ・ヴォーゲル・福島範昌訳・2000・『ジャパニアズナンバー
ワン - それからどうなった』たちばな出版・)
Ward, G. Kingsley. 1985. *Letters of A Businessman to His Son*. Tokyo: Yohan
Publications. (キングスレイ・ウォード・城山三郎訳・1989・『ビジネスマン
の父より息子への30通の手紙』新潮社・)
青木保. 2001. 『異文化理解』岩波書店・
秋澤公二. 1992. 『続アメリカ人の英語』丸善・
麻生誠. 2009. 『日本の学歴エリート』講談社・
天野郁夫. 1992. 『学歴の社会史 - 教育と日本の近代 - 』新潮社・
アントラム 柏木利美. 1998. 『日本とアメリカ 愛をめぐる逆さの常識』中央公論社・

- 飯倉晴武．2003．『日本人のしきたり』青春出版社．
- 池田潔．1949．『自由と規律 - イギリスの学校生活 - 』岩波書店．
- 伊佐雅子監修．2007．『多文化社会と異文化コミュニケーション』三修社．
- 板坂元．1971．『日本人の論理構造』講談社．
- 板坂元．1973．『ああアメリカ』講談社．
- 大島良行．1996．『「風と共に去りぬ」の女たち』専修大学出版局．
- 梶原一明．2002．『トヨタウェイ』ビジネス社．
- 片野優・須貝典子．2012．『こんなにちがうヨーロッパ各国気質』草思社．
- 勝浦クック範子．1991．『日本の子育て アメリカの子育て』サイエンス社．
- カニングハム久子．1988．『海外子女教育事情』新潮社．
- 加藤秀俊．1967．『アメリカ人』講談社．
- 加藤泰子・マーシャ＝ロズマン．1988．『ことばで探るアメリカ』ジャパントイズム．
- 亀井俊介監修．1992．『読んで旅する世界の歴史と文化 アメリカ』新潮社．
- 亀井俊介．2000．『アメリカ文化と日本』岩波書店．
- 亀井俊介．2003．『わがアメリカ文化誌』岩波書店．
- 苅谷剛彦．1995．『大衆教育社会のゆくえ』中央公論社．
- 苅谷剛彦．2012．『イギリスの大学・ニッポンの大学』中央公論新社．
- 川上あかね．1995．『わたしのオックスフォード』晶文社．
- 木村治美．1981．『静かに流れよテムズ川』文芸春秋．
- 木村治美．1984．『イギリス交際考』文芸春秋．
- キーン、ドナルド．足立康訳．2002．『果てしなく美しい日本』講談社．
- キーン、ドナルド．角地幸男訳．2011．『ドナルド・キーン自伝』中央公論新社．
- 小坂井敏晶．1996．『異文化受容のパラドックス』朝日新聞社．
- 小西章子．1984．『遥かなるボストン』新潮社．
- 小林章夫．1990．『イギリス紳士のユーモア』講談社．
- 小林章夫．1998．『物語イギリス人』文芸春秋．
- 小林哲夫．2007．『ニッポンの大学』講談社．
- 小林祐子．1975．『身ぶり言語の日英比較』ELEC．
- 栄陽子．1993．『国際化時代の子育てを考える親へ』大和書房．
- 佐藤淑子．2001．『イギリスのいい子 日本のいい子』中央公論新社．

- 清水正昭．1986．『イギリスの学校生活』サイマル出版会．
- 庄子垂紀．2000．『ママはアメリカの弁護士さん』武田出版．
- ジョイス、コリン．谷岡健彦訳．2006．『「ニッポン社会」入門』NHK出版．
- ジョイス、コリン．谷岡健彦訳．2009．『「アメリカ社会」入門』NHK出版．
- ジョイス、コリン．森田浩之訳．2011．『「イギリス社会」入門』NHK出版．
- 鈴木孝夫．1973．『ことばと文化』岩波書店．
- 鈴木孝夫．1990．『日本語と外国語』岩波書店．
- 鈴木孝夫．1995．『日本語は国際語になりうるか』講談社．
- 瀬々敦子．1995．「日米英で法学教育を受けて」『私の海外留学体験記』大修館所収．
- 相馬勝．2000．『ハーバード大学で日本はこう教えられている』新潮社．
- 高尾優子．1998．『イギリス人はおかしい』文芸春秋．
- 高木真理子．1992．『日系アメリカ人の日本観 - 多文化社会ハワイから - 』淡交社．
- 竹内洋．1993．『パブリック・スクール』講談社．
- 橘由加．2004．『アメリカの大学教育の現状』三修社．
- 津神久三．1985．『アメリカ人の原像』中央公論社．
- 土居健郎．1971．『「甘え」の構造』弘文堂．
- 外山滋比古．1984．『子育ては言葉の教育から』PHP．
- 直塚玲子．1980．『欧米人が沈黙するとき』大修館書店．
- 中根千枝．1967．『タテ社会の人間関係』講談社．
- 中野英子．1978．『アメリカの女たち』PHP．
- 中山茂．1994．『大学とアメリカ社会』朝日新聞社．
- 長沼秀世．1985．『ニューヨークの憂鬱』中央公論社．
- 新美芳郎．1987．『バンク・オブ・アメリカ副頭取への道は遠かった - 私のアメリカ企業転職記』ビジネス社．
- 西田ひろ子．1989．『事例で見る日米コミュニケーション・ギャップ』大修館書店．
- ネウストブニー、J. V．1982．『外国人とのコミュニケーション』岩波書店．
- 野村雅一．1996．『身ぶりとしぐさの人類学』中央公論社．
- 服部孝彦．1985．『アメリカへ返りたい! - 日米異文化衝突戦争 - 』日本図書
ライブ．
- 林信吾．2009．『イギリス型 豊かさ の真実』講談社．

- 広岡守穂編．2002．『ここが違うよ、日本の子育て』学陽書房．
- 深田祐介．1983．『あざやかな悪妻たち』文芸春秋．
- 深田祐介．1984．『われら海を渡る』文芸春秋．
- 福島良一．1991．『大リーグ物語』講談社．
- 藤原正彦．1991．『遥かなるケンブリッジ』新潮社．
- 藤原正彦．2006．『祖国とは国語』新潮社．
- 藤原正彦．2006．『この国のけじめ』文芸春秋．
- プロズナハン、リージャー．岡田妙・斎藤紀代子訳 1988．『しぐさの比較文化』大修館書店．
- 松尾弑之．1983．『国際交流スピーキング』筑摩書房．
- 松尾弑之．1988．『不思議の国アメリカ』講談社．
- 三浦昭．1987．『日本語教師の見たアメリカの素顔』研究社．
- 三浦宏一．1999．『アメリカの物差し、日本の物差し』アルク．
- 水谷信子．1982．『英語の生態』ジャパントイムズ．
- ミルワード、ピーター．安西徹雄訳．1979．『イギリスのこころ』三省堂書店．
- ミルワード、ピーター．舟川一彦訳．1983．『イギリス風物詩』大修館書店．
- 野村雅一．1996．『身ぶりとしぐさの人類学』中央公論新社．
- 盛田昭夫．1987．『学歴無用論』朝日新聞社．
- 山田勝．1993．『イギリス人の表と裏』日本放送出版協会．
- 和田秀樹．2009．『新学歴社会と日本』中央公論新社．
- ICS 国際文化教育センター編．1995．『私の海外留学体験記』大修館書店．